

仏教企画通信

発行日 | 平成30年3月1日

発行所 | 有限会社 仏教企画
〒252-0113
神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
Tel.042-703-8641
Fax.042-783-0989

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宜
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

7

「諺」について
とくに人生無常と
関連づけて

偶感 あれこれ

駒澤大学名誉教授
佐々木宏幹

幼い頃、よく小さな嘘をついた。たとえば友達と他家の苺畑の苺をとって食べているのをその家の者に見つかり、「その苺を何処で貰ったの」と訊かれ、思わず「誰それさんから貰った」と答えた。嘘をついているのだから胸はドキドキだ。

嘘を見破った大人はとたんに顔を強張らせて「嘘つきは泥棒の始まり」だ、と強い調子で叱りつけ、長いお説教をきかせられたものである。

「嘘つきは泥棒の始まり」という文言は子供でもすぐ意味が分かる内容であり、一度耳にしたら忘れられない「諺」である。

子供たちは、大人たちから見て許すことのできない数々の行いを繰り返して、その都度、あるいは強く、あるいは優しくたしなめられながら、一人前の人間に成長していくのである。

「嘘つきは泥棒の始まり」という文言は「諺」であると記したが、しからば「諺」とは何かと訊かれて、それを説明するのは、とくに子供たちにするのは、そう簡単ではなからう。

そこで国語辞典に当たってみる。

「諺とは古くから人々に言いならわされたことば。教訓―風刺などの意を寓した短句や秀句」であり「時かぬ種ははえぬ」の類であるという。

太平洋戦争の頃、旧制中学校には「軍事教練」という授業があった。これは一九二五年(大正一四)より諸学校で行われていた軍事に関する訓練で、一九四五年(昭和二〇)の敗戦まで続いた。

毎朝あった朝礼では、校長の話があった後に陸軍中尉の教官が壇上に立って威勢のいい教訓を述べるのが常だった。

M教官はよく「精神一到何事かならざらん」(何事も志して熱心に努力すればどんなことでも成就する)という諺と「斃れて後已む」(死ぬまで努力する)という諺を繰り返して強調した。前者は南宋の朱子が著した『朱子語類』巻八の文であり、後者は秦・漢時代の儒者の古礼に関する説をまとめたものである。

M教官は陸軍士官学校卒の言わばエリート将校であり、その姿は子供の目には実に恰好よく映った。カーキ色の軍服姿で「〜であるからして〜するよにせい」と声を張り上げる姿は、七〇年経った今でも耳朶を離れない。教育というものの恐ろしさの一面であるといえよう。

M教官はその後召集されて北方の戦線に向かう途中、乗っていた船が撃沈され戦死されたと聞いた。悲しかった思い出の一つである。

小・中学生の時代には「修身」という科目があり、「教育勅語」と関連づけながら教わったが、内容は自分の行いを正し身をおさめるというもので、徳性の向上を目指して明治一〇年代から敗戦まで続いた。

「修身」には古くから伝わる諺がよく用いられたのは、戦争時代の要請であったのであろう。

「諺」の諸相

すでに述べたように諺は、「人生の教訓―風刺などの意を寓した短句や秀句」であるから、知的で普遍性に富むものから下品で俗悪なだけじゃなものまで山ほどある。紹介しようとするに限がないので以下では仏教に関係するもの、とくに「無常」の意を多少とも含んだものについて記してみたい。

言うまでもなく「無常」は「常住」の対語であり、「世間の一切のもの、万象ごとごとく生滅して止まることなく移り変わる」ということである。「無常憑み難し、知らず露命いかなる道の草にか落ちん、身已に私に非ず」(無常(死)はいつやってくるかわからない。草叢に宿る露のようにはかないのちは、いづどこで消えるか全く分からないものである)(『修証義、第一章総序』)である。

(1)「会つは別れの始め」
出会った者は必ず別れなければならぬ。親子でも夫婦



でも友人でもペットでも、出会った者は悲しいことだが別れることを逃れえない。仏教ではこれを「愛別離苦」と言い、四苦八苦の一つとしている。

「別れ」の語ですぐ頭に浮かぶのは島崎藤村作詞の「惜別の歌」である。

①遠き別れに耐えかねて
この高殿に登るかな
悲しむなかれ 我が友よ
旅の衣をととのえよ
②別れと言えば昔より
この人の世の常なるを
流るる水を眺むれば 夢はずかしき涙かな
知られるように藤村は、明治時代中期から大正時代にかけて展開したロマン(浪漫主義)を代表する詩人・作家の一人であり、詩集『若葉集』や小説『破戒』などで有名である。

この歌を教わったのは富山県出身のM先輩からであり、大学の屋上で一緒に歌ったものである。M氏が卒業して東京を去るときにも、この歌を

口にしたことを憶えている。

学寮で二年なり三年なり生活を共にした人が北海道や九州に帰っていくときの別れの寂しさは相当なものであった。現在の学生はどうであろうか。どうも当時に比べてドライ性が強くなっている感じがするのだが。。

(2)二寸の光陰軽んずべからず
ちよつとした時間でも無駄にしてはならない。去った「時」は二度と帰らない。「帰れ帰れもう一度 楽しかったあの日よ!」といくら切望しても「無常」の鉄則は動かしようがない。さきに引用した『修証義』には「命は光陰に移されて暫くも停め難し、紅顔いづくへか去りにし、尋ねんとするに蹤跡なし」(いのちは月日(光陰)と共に過ぎ去るものであり、ほんの一寸の間でも停めておくのは不可能である。少年の日の若きにあふれたあの顔は、一体どこに行ってしまったのかと、いくら尋ねてもあとかたもない)(『総

序) この諺は、「少年老い易く学成り難し一寸の光陰軽んずべからず」(朱熹「偶成詩」)の引用である。日々老いていくことは、現在の私が強く実感していることである。

(3)「孝行したいときに親はなし」 幼少の頃からよく耳にした諺であるが、私にはあまり実感がなかった。二歳のときに父を、三歳で母を喪つていた私にとって、「孝行をしよう」として「親はなし」という状況であったからである。「孝行」という語には二つの意味がある。

一つは子が親を敬い、親に尽す行いのことであり、もう一つは親に対するように他人に尽すことである。

子供にもいろいろあり、①親にさしたる面倒をかけず、②親にさすことと成長する者があり、③迷惑ばかりかけるドラ息子もいる。

この諺はさしずめ③の意味の息子・娘を指している。さきさん親を困らせて、やつと一人前になり、さてこれから親孝行でもと思う頃には親はもうこの世にはいない。子供の反省の句である。

この諺は、「子供に「無常」を説くときのキーワードになるのではなからうか。親子関係の無常性を衝いていると考えられるからである。

(4)「葬式すんで医者話」 葬式をすませた後で、あの医者に診てもらった方がよか

つたと後悔してももう処置なしである。時機を逸した後では、あれこれ反省し後悔してもどうにもならないことを意味する。この諺によく通じるものに「後悔先に立たず」がある。

事が済んでしまつてから後悔しても何の役にも立たない。しかし私たちはその事が生じる前には中々気づかないものだという意味の警句である。(沙石集)。

これをものしたのは臨済宗の無住道暁であり、博識で話題が豊富で語り口が巧みであったとされる。原文は「後悔先に立たぬ事を弁へざることを愚かにするかな」である。

(5)「朝には紅顔ありて夕には白骨となる」 ここで「朝」とは若い時代、「夕」は年老いた時期を、そして「紅顔」は若々しく血色のよいことを意味している。平安中期の歌人で、中古三十六歌仙の一人藤原公任の作とされる。

公任の『和漢朗詠集』には「朝に紅顔有りて世路に誇れども、暮に白骨となりて郊原に朽ちぬ」とある。「無常観(感)」の一表現であり、生死が予測できないことを示した身につまされる諺である。大学で「青春花と咲き匂う」と大声で謳歌したのは、そう遠くない頃と思いたいのだが、すでに七〇年近い星霜が過ぎ去つた。

大学時代に元氣澆刺として肩で風を切つていた先輩、同僚たちも、人により多少の差

お寺ではこういうふうによつて、これをうまくやつたよ、ここはこういうふうによつたよというところが全部センターが内容を理解して、それを指導してあげるようにならないと、センターの役割が重くないんじゃないかと思うんです。それができているんじゃないかと思うんです。もっと成功事例、あるいは失敗もデータベースにして、センターが全部それを把握して、こういうやり方をすればきつという方向に行きますよ、こういうやり方をすると失敗する可能性がありますよ

ざわが宗務所を経て、ハンコだけ押しているのではなくて、そういうところを事務的、もっと簡略化できれば簡略化してしまふ。そして、空いた余力をそこの寺院の活性化というところにとんどん注いでいくほうが、私はいいのではないかと思います。

藤木 なるほど。今は事務手続で目いっぱい。

柗野 それだけの労務を担っているから、課されたほうはやらざるを得ないという状況だと思えますので、それよりも、地方の大変な限界集落にあるような寺院を救つてい

はあれ皆老人となつてしまつた。生来身体虚弱で運動神経のとりにくい私は両親同様にとでも長生きはできまいと思つてきた。それが何と八〇歳半ばを過ぎて、こうして文を書いている。

この二、三年の間に親しかった先輩や同僚の何人かが次々と仏界の住人になつてしまつた。

大学の寮生たちの挨拶は「お早う」とか「今晩は」ではなく「オース」と言えと命じられた。廊下ですれ違ふときこちらが「オース」と口にすると「オース」ではなく「オース」と返された。「ス」と「シ」の間には先輩と後輩の差があつた。

その懐かしい先輩に賀状を出しても返事が届かなくなつた。寂しさがつのる。

ある店の女性店主とは何十年もお付き合いである。いつも「先生お若いんですね。お元氣で何よりです」と言つてくれる。しかし買い物袋を下げて帰ろうとすると「どうぞお気を付けになって」と必ず付け加える。

自分ではまだ足腰は大丈夫と思つているのだが、相手の目には「夕の人」に見えているのであろうか。

(6)「人間万事塞翁が馬」 「塞翁」とは辺境の砦に住んでいる老人のこと。塞翁が飼つていた馬が逃げだしたが、やがて北方で育つた駿馬を連れて戻つてきた。

喜んでその馬に乗つた塞翁

の息子は落馬して足を折つてしまつた。そのため戦士にならず、戦場に行くことができず長生きできたという話。

人生は吉凶・禍福が予測できないことのためである(淮南子の「人間訓」)。

右の諺によく似たものに「吉凶は糾える繩の如し」というのがある。「人生は繩のよれあうように、吉事と凶事とが相表裏して変転するものだ」ということ。

この諺も「無常」のたとえとして活用できる中味である。人は「常住」(生滅変化なく、永久に常在り続けること)では決してない。

仏教は、人間のみなならず万物・万象はことごとく「無常」であると説く。ところが人間は「常住」を求めてやまない。「無常」であるのに「常住」を願つてもかなわないから「苦」が生じる。仏教で説く「苦」は「思いどおりにならないこと」を意味する。

苦勞に苦勞を重ねてやつと目的をはたしてやれやれと思

かなければいけないのではないでしようか。宗門として。のたれ死にはさせられないじゃないですか。ですからそういう意味で、そういうところのご住職を都会に出てくるチャンスをつくつて、アマゾンではなくて、宗務庁がつくつて、それで私は、限界集落を初めとする経営的に苦しいお寺がよくなつていく方向を考えなければいけないと思つてます。

例えば、都会でご葬儀をやり組めないのにね。藤木 なるほどね。自分が取り組めないのにね。正木 何の面倒も見なくせに、遺骨を預からないくせに、何で鳥荒らすんだというわけです。文字どおり我利我利亡者です。こういうことは上からきちんと組織として取り組まないと難しいですね。

柗野 それから、ここで独居のお話がまた出ましたからもう一つ、実は私が自分で取り組んでるのは、独居の人たちが要は亡くなった後、自分がどうなるか分からない、という不安を抱いている人たちへの対策です。ですから、そういう人たちは、私が一時間以上かけて、その人の一生を、人となりやヒアリングして、私はご戒名を必ず二つ作り安名授与を行っています。一つだとお任せがましくなるから。それで、どうですか。言つて選んでいただいて、たまにはミックスしたのがいいつていう人もあります。そうするとご戒名の意味が通じなくなるなりすよ、などと説明をしながら、選んでいただくわけですが、

だ後に落着する、きまりがつく」ということになり、諺の意味は「死ぬまで努力して屈しない」となる。

この文言は、古代中国の王朝の一つである周から秦・漢時代の儒者の古礼に関する諸説を集めた五経の一つ、『礼記』に出てくる。

「死ぬまで努力する」と似た諺に「倒れても土を掴む」(転んでもたでは起きない)がある。太平洋戦争中に軍の指導者や右翼のインテリが書いたり口にしたりしていたように思うが、現代の競争社会においても用いられているかもしれない。

仏教的には「無常の人生だから、日々を大切に生きよう」と表現する方が今日的であるように思う。

最後に、私が好きな諺を一つ。

「年々歳々花相似たり 歳々年々人同じからず」。「花は毎年同じように咲くが、人は年ごとに変わっていく」と謳う。毎年桜の花が咲く頃、この句を思う。桜の花がハラハラと散るのを眺めていると。去年はあの人が逝つたと。今年はその人も去つたと。「無常」の自然な姿なのだが、頭では判つていても、心中忸怩たるものがある。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかもと水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中ににある人と邂逅、又かくのごとし」(鴨長明「方丈記」)。

要ですが、それだけでは、いつまでたつてもまとまりません。具体的な事例を挙げますと横濱、東京あたりでも、独居老人で自分が亡くなったらば遺骨を納めるお寺も何もないというので、富山県にあるお寺さんがそれを引き受けるといつて、納骨堂を造つたのです。そうしたら、もともとの地域の寺院さんが、何でおれの島を荒らすんだと言つて、妨害しました。

藤木 なるほどね。自分が取り組めないのにね。正木 何の面倒も見なくせに、遺骨を預からないくせに、何で鳥荒らすんだというわけです。文字どおり我利我利亡者です。こういうことは上からきちんと組織として取り組まないと難しいですね。

柗野 それから、ここで独居のお話がまた出ましたからもう一つ、実は私が自分で取り組んでるのは、独居の人たちが要は亡くなった後、自分がどうなるか分からない、という不安を抱いている人たちへの対策です。ですから、そういう人たちは、私が一時間以上かけて、その人の一生を、人となりやヒアリングして、私はご戒名を必ず二つ作り安名授与を行っています。一つだとお任せがましくなるから。それで、どうですか。言つて選んでいただいて、たまにはミックスしたのがいいつていう人もあります。そうするとご戒名の意味が通じなくなるなりすよ、などと説明をしながら、選んでいただくわけですが、

です。ですから生前に、要はご戒名も授けてしまふのです。自分の埋葬するところもきちつと永代供養墓で、とご本人が確認し納得していただくことがもう一つあります。それは、何を私はやっているかといますと、こういうカード、病院の診察券のようなカードを作つたんです。普通のパウチして、「この方は私どもで永代供養をすることにしている方で、ご戒名も授けてあります。万が一、このカードをお持ちの方が行き倒れになったときには、お寺に連絡ください」というカードをつくつて、定期入れのようなものに入れてくださいとお願ひしています。というのは、万が一、震災のときのようになつたら、行きどころが決まらなくても、ほかへ行つてしまふ可能性がたかさんあるわけですね。ですから、そのカードを身分証明書みたいな形で役立ててもらえれば、必ず連絡があると思ひますし、ご供養もできると考えたのです。それを小さなカード、病院の診察券みたいなものを作つて、必ず安名授与の後にお渡ししてあります。いっばいやらなくてはいけないうことあるんです。

藤木 ありますね。

柗野 あるんです。そういうのも宗務庁が旗振つてやつたらいいんです。

藤木 やつたらいいと思ひますね。やれる分野はうんとあると思ひますよ。

正木 これは余計な話なのですが、私、いろんな宗派と付

つたと後悔してももう処置なしである。時機を逸した後では、あれこれ反省し後悔してもどうにもならないことを意味する。この諺によく通じるものに「後悔先に立たず」がある。

事が済んでしまつてから後悔しても何の役にも立たない。しかし私たちはその事が生じる前には中々気づかないものだという意味の警句である。(沙石集)。

これをものしたのは臨済宗の無住道暁であり、博識で話題が豊富で語り口が巧みであったとされる。原文は「後悔先に立たぬ事を弁へざることを愚かにするかな」である。

(5)「朝には紅顔ありて夕には白骨となる」 ここで「朝」とは若い時代、「夕」は年老いた時期を、そして「紅顔」は若々しく血色のよいことを意味している。平安中期の歌人で、中古三十六歌仙の一人藤原公任の作とされる。

公任の『和漢朗詠集』には「朝に紅顔有りて世路に誇れども、暮に白骨となりて郊原に朽ちぬ」とある。「無常観(感)」の一表現であり、生死が予測できないことを示した身につまされる諺である。大学で「青春花と咲き匂う」と大声で謳歌したのは、そう遠くない頃と思いたいのだが、すでに七〇年近い星霜が過ぎ去つた。

大学時代に元氣澆刺として肩で風を切つていた先輩、同僚たちも、人により多少の差

の息子は落馬して足を折つてしまつた。そのため戦士にならず、戦場に行くことができず長生きできたという話。

人生は吉凶・禍福が予測できないことのためである(淮南子の「人間訓」)。

右の諺によく似たものに「吉凶は糾える繩の如し」というのがある。「人生は繩のよれあうように、吉事と凶事とが相表裏して変転するものだ」ということ。

この諺も「無常」のたとえとして活用できる中味である。人は「常住」(生滅変化なく、永久に常在り続けること)では決してない。

仏教は、人間のみなならず万物・万象はことごとく「無常」であると説く。ところが人間は「常住」を求めてやまない。「無常」であるのに「常住」を願つてもかなわないから「苦」が生じる。仏教で説く「苦」は「思いどおりにならないこと」を意味する。

苦勞に苦勞を重ねてやつと目的をはたしてやれやれと思

宗門の課題

ざわが宗務所を経て、ハンコだけ押しているのではなくて、そういうところを事務的、もっと簡略化できれば簡略化してしまふ。そして、空いた余力をそこの寺院の活性化というところにとんどん注いでいくほうが、私はいいのではないかと思います。

藤木 なるほど。今は事務手続で目いっぱい。

柗野 それだけの労務を担っているから、課されたほうはやらざるを得ないという状況だと思えますので、それよりも、地方の大変な限界集落にあるような寺院を救つてい

かなければいけないのではないでしようか。宗門として。のたれ死にはさせられないじゃないですか。ですからそういう意味で、そういうところのご住職を都会に出てくるチャンスをつくつて、アマゾンではなくて、宗務庁がつくつて、それで私は、限界集落を初めとする経営的に苦しいお寺がよくなつていく方向を考えなければいけないと思つてます。

例えば、都会でご葬儀をやり組めないのにね。藤木 なるほどね。自分が取り組めないのにね。正木 何の面倒も見なくせに、遺骨を預からないくせに、何で鳥荒らすんだというわけです。文字どおり我利我利亡者です。こういうことは上からきちんと組織として取り組まないと難しいですね。

柗野 それから、ここで独居のお話がまた出ましたからもう一つ、実は私が自分で取り組んでるのは、独居の人たちが要は亡くなった後、自分がどうなるか分からない、という不安を抱いている人たちへの対策です。ですから、そういう人たちは、私が一時間以上かけて、その人の一生を、人となりやヒアリングして、私はご戒名を必ず二つ作り安名授与を行っています。一つだとお任せがましくなるから。それで、どうですか。言つて選んでいただいて、たまにはミックスしたのがいいつていう人もあります。そうするとご戒名の意味が通じなくなるなりすよ、などと説明をしながら、選んでいただくわけですが、

だ後に落着する、きまりがつく」ということになり、諺の意味は「死ぬまで努力して屈しない」となる。

この文言は、古代中国の王朝の一つである周から秦・漢時代の儒者の古礼に関する諸説を集めた五経の一つ、『礼記』に出てくる。

「死ぬまで努力する」と似た諺に「倒れても土を掴む」(転んでもたでは起きない)がある。太平洋戦争中に軍の指導者や右翼のインテリが書いたり口にしたりしていたように思うが、現代の競争社会においても用いられているかもしれない。

仏教的には「無常の人生だから、日々を大切に生きよう」と表現する方が今日的であるように思う。

最後に、私が好きな諺を一つ。

「年々歳々花相似たり 歳々年々人同じからず」。「花は毎年同じように咲くが、人は年ごとに変わっていく」と謳う。毎年桜の花が咲く頃、この句を思う。桜の花がハラハラと散るのを眺めていると。去年はあの人が逝つたと。今年はその人も去つたと。「無常」の自然な姿なのだが、頭では判つていても、心中忸怩たるものがある。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかもと水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中ににある人と邂逅、又かくのごとし」(鴨長明「方丈記」)。

要ですが、それだけでは、いつまでたつてもまとまりません。具体的な事例を挙げますと横濱、東京あたりでも、独居老人で自分が亡くなったらば遺骨を納めるお寺も何もないというので、富山県にあるお寺さんがそれを引き受けるといつて、納骨堂を造つたのです。そうしたら、もともとの地域の寺院さんが、何でおれの島を荒らすんだと言つて、妨害しました。

藤木 なるほどね。自分が取り組めないのにね。正木 何の面倒も見なくせに、遺骨を預からないくせに、何で鳥荒らすんだというわけです。文字どおり我利我利亡者です。こういうことは上からきちんと組織として取り組まないと難しいですね。

柗野 それから、ここで独居のお話がまた出ましたからもう一つ、実は私が自分で取り組んでるのは、独居の人たちが要は亡くなった後、自分がどうなるか分からない、という不安を抱いている人たちへの対策です。ですから、そういう人たちは、私が一時間以上かけて、その人の一生を、人となりやヒアリングして、私はご戒名を必ず二つ作り安名授与を行っています。一つだとお任せがましくなるから。それで、どうですか。言つて選んでいただいて、たまにはミックスしたのがいいつていう人もあります。そうするとご戒名の意味が通じなくなるなりすよ、などと説明をしながら、選んでいただくわけですが、

です。ですから生前に、要はご戒名も授けてしまふのです。自分の埋葬するところもきちつと永代供養墓で、とご本人が確認し納得していただくことがもう一つあります。それは、何を私はやっているかといますと、こういうカード、病院の診察券のようなカードを作つたんです。普通のパウチして、「この方は私どもで永代供養をすることにしている方で、ご戒名も授けてあります。万が一、このカードをお持ちの方が行き倒れになったときには、お寺に連絡ください」というカードをつくつて、定期入れのようなものに入れてくださいとお願ひしています。というのは、万が一、震災のときのようになつたら、行きどころが決まらなくても、ほかへ行つてしまふ可能性がたかさんあるわけですね。ですから、そのカードを身分証明書みたいな形で役立ててもらえれば、必ず連絡があると思ひますし、ご供養もできると考えたのです。それを小さなカード、病院の診察券みたいなものを作つて、必ず安名授与の後にお渡ししてあります。いっばいやらなくてはいけないうことあるんです。

藤木 ありますね。

柗野 あるんです。そういうのも宗務庁が旗振つてやつたらいいんです。

藤木 やつたらいいと思ひますね。やれる分野はうんとあると思ひますよ。

正木 これは余計な話なのですが、私、いろんな宗派と付

つたと後悔してももう処置なしである。時機を逸した後では、あれこれ反省し後悔してもどうにもならないことを意味する。この諺によく通じるものに「後悔先に立たず」がある。

事が済んでしまつてから後悔しても何の役にも立たない。しかし私たちはその事が生じる前には中々気づかないものだという意味の警句である。(沙石集)。

これをものしたのは臨済宗の無住道暁であり、博識で話題が豊富で語り口が巧みであったとされる。原文は「後悔先に立たぬ事を弁へざることを愚かにするかな」である。

(5)「朝には紅顔ありて夕には白骨となる」 ここで「朝」とは若い時代、「夕」は年老いた時期を、そして「紅顔」は若々しく血色のよいことを意味している。平安中期の歌人で、中古三十六歌仙の一人藤原公任の作とされる。

公任の『和漢朗詠集』には「朝に紅顔有りて世路に誇れども、暮に白骨となりて郊原に朽ちぬ」とある。「無常観(感)」の一表現であり、生死が予測できないことを示した身につまされる諺である。大学で「青春花と咲き匂う」と大声で謳歌したのは、そう遠くない頃と思いたいのだが、すでに七〇年近い星霜が過ぎ去つた。

大学時代に元氣澆刺として肩で風を切つていた先輩、同僚たちも、人により多少の差

の息子は落馬して足を折つてしまつた。そのため戦士にならず、戦場に行くことができず長生きできたという話。

人生は吉凶・禍福が予測できないことのためである(淮南子の「人間訓」)。

右の諺によく似たものに「吉凶は糾える繩の如し」というのがある。「人生は繩のよれあうように、吉事と凶事とが相表裏して変転するものだ」ということ。

この諺も「無常」のたとえとして活用できる中味である。人は「常住」(生滅変化なく、永久に常在り続けること)では決してない。

仏教は、人間のみなならず万物・万象はことごとく「無常」であると説く。ところが人間は「常住」を求めてやまない。「無常」であるのに「常住」を願つてもかなわないから「苦」が生じる。仏教で説く「苦」は「思いどおりにならないこと」を意味する。

苦勞に苦勞を重ねてやつと目的をはたしてやれやれと思

かなければいけないのではないでしようか。宗門として。のたれ死にはさせられないじゃないですか。ですからそういう意味で、そういうところのご住職を都会に出てくるチャンスをつくつて、アマゾンではなくて、宗務庁がつくつて、それで私は、限界集落を初めとする経営的に苦しいお寺がよくなつていく方向を考えなければいけないと思つてます。

例えば、都会でご葬儀をやり組めないのにね。藤木 なるほどね。自分が取り組めないのにね。正木 何の面倒も見なくせに、遺骨を預からないくせに、何で鳥荒らすんだというわけです。文字どおり我利我利亡者です。こういうことは上からきちんと組織として取り組まないと難しいですね。

柗野 それから、ここで独居のお話がまた出ましたからもう一つ、実は私が自分で取り組んでるのは、独居の人たちが要は亡くなった後、自分がどうなるか分からない、という不安を抱いている人たちへの対策です。ですから、そういう人たちは、私が一時間以上かけて、その人の一生を、人となりやヒアリングして、私はご戒名を必ず二つ作り安名授与を行っています。一つだとお任せがましくなるから。それで、どうですか。言つて選んでいただいて、たまにはミックスしたのがいいつていう人もあります。そうするとご戒名の意味が通じなくなるなりすよ、などと説明をしながら、選んでいただくわけですが、

だ後に落着する、きまりがつく」ということになり、諺の意味は「死ぬまで努力して屈しない」となる。

この文言は、古代中国の王朝の一つである周から秦・漢時代の儒者の古礼に関する諸説を集めた五経の一つ、『礼記』に出てくる。

「死ぬまで努力する」と似た諺に「倒れても土を掴む」(転んでもたでは起きない)がある。太平洋戦争中に軍の指導者や右翼のインテリが書いたり口にしたりしていたように思うが、現代の競争社会においても用いられているかもしれない。

仏教的には「無常の人生だから、日々を大切に生きよう」と表現する方が今日的であるように思う。

最後に、私が好きな諺を一つ。

「年々歳々花相似たり 歳々年々人同じからず」。「花は毎年同じように咲くが、人は年ごとに変わっていく」と謳う。毎年桜の花が咲く頃、この句を思う。桜の花がハラハラと散るのを眺めていると。去年はあの人が逝つたと。今年はその人も去つたと。「無常」の自然な姿なのだが、頭では判つていても、心中忸怩たるものがある。

「ゆく河の流れは絶えずして、しかもと水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中ににある人と邂逅、又かくのごとし」(鴨長明「方丈記」)。

の息子は落馬して足を折つてしまつた。そのため戦士にならず、戦場に行くことができず長生きできたという話。

人生は吉凶・禍福が予測できないことのためである(淮南子の「人間訓」)。

右の諺によく似たものに「吉凶は糾える繩の如し」というのがある。「人生は繩のよれあうように、吉事と凶事とが相表裏して変転するものだ」ということ。

この諺も「無常」のたとえとして活用できる中味である。人は「常住」(生滅変化なく、永久に常在り続けること)では決してない。

仏教は、人間のみなならず万物・万象はことごとく「無常」であると説く。ところが人間は「常住」を求めてやまない。「無常」であるのに「常住」を願つてもかなわないから「苦」が生じる。仏教で説く「苦」は「思いどおりにならないこと」を意味する。

苦勞に苦勞を重ねてやつと目的をはたしてやれやれと思



松本写真詩集「天上を翔る川」渡辺出版 より

編集後記

平成30年が早や2月半ばです。平成になって30年、世の中が変わって来たと感じるのはわたくしだけではないと思います。

仏教界に身を置くものとして、2月4日の朝日新聞の朝刊「弔いのあり方」は、今のある世相を表しているかと思

います。朝日新聞のデジタルのアンケートに答える形で223の回答を掲載しています。御檀家の方と身近に接

せている私達とは、かなりの隔たりがあると感じますが、だからと言って私達に関係がないとは言えないと思います。

昭和の時代は多くは伝統の形式に従ってお坊さんをお願いしてお葬式をしていました。今はアマゾンやイオンに代表されるようにお寺のご住職で



はわかっていませんから、誰でもいいのです。

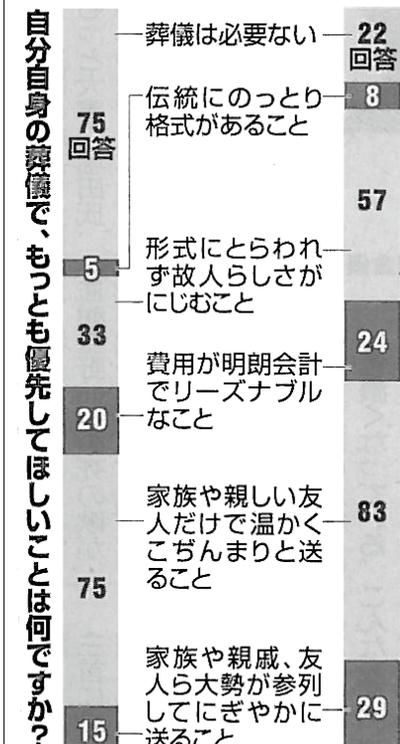
このアンケートはお寺に所属していない檀家以外の方々の考え方が反映されています。例えば、次の回答がその内容です。

自分自身の葬儀で優先してほしい内容の問いかけには、223の回答中148件がお葬式は必要と答えています。

が、仏式を望んでの葬式ではありませんので、私達がせっかくなか培ってきた文化をもっと伝える努力をしなければなら

ないと思います。66パーセントの方々への応え方の一つとしてご法話は欠かせないと思

夫や妻、親の葬儀で、もっとも優先する(優先しない)は何ですか?



朝日新聞朝刊より

ら今でも大事なことでして武典の中心になっていきます。葬儀には、日頃お寺に縁がない都会に住む方や若い方々も参列されますので、数少ないチャンスとしてこの機会を大事にしています。

ご存知かと思いますが、平成29年12月10日、大本山永平寺西堂の奈良康明先生がご遷化されました。永平寺東京別院で平成30年1月29日建夜、30日に本葬儀が修行されました。

本堂内にも外にも大勢の方が参列されていきました。私との出会いは昭和38年に駒大に入学したときに先生は英語を教えておられましたことか

らです。その後の御業績は皆さまご存知の通りですが、私が注目したのは昭和46年から平成5年までNHKの「このころの時代」に御出演された

ことです。先生の語り口からどれだけ多くの方が仏教を学ばれたか計り知れません。駒大の存在も高めて来られました。宗門は更なる人材育成が望まれます。

苦小牧駒澤大学の設置者変更は11月に文科省から認可を前提にした仮決定がされたようです。しかし、審査意見が

9つもあり、駒大理事会と先方とはほとんど話し合いが進んでいないのではないのでしょうか。この場合どうなるのでしょうか。十分な話し合いがないままに進めた結果がこのようになっていると思います。大事なことは現役の学生さんには迷惑をかけないことだと考えます。

手まり学園

寄附者御芳名

H29.10.2~H30.1.25

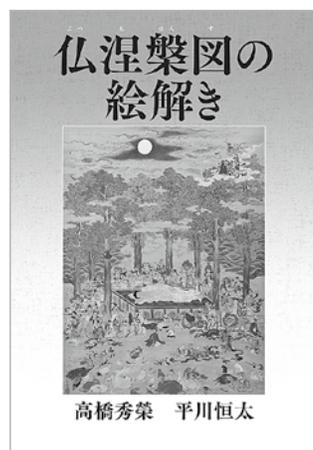
所在地	寺院名(個人名)	金額
東京都	砂金智佐(87)	3,000
神奈川県	宗泉寺	10,000
神奈川県	青木義次(51)	6,000
東京都	砂金智佐(87)	3,000
東京都	全龍寺	100,000
東京都	(株)翔龍	100,000
東京都	砂金智佐(88)	3,000
神奈川県	青木義次(52)	6,000
神奈川県	青木義次(53)	7,000
東京都	オオタミワ	20,000
福島県	徳成寺	10,000
東京都	砂金智佐(89)	3,000
東京都	山本峯也	30,000
合計		301,000

仏教企画 新刊書のご紹介

仏涅槃図の絵解き

高橋秀榮・平川恒太共著 A5版/16ページ(4色8ページ、1色8ページ)

曹洞禅グラフ144号での対談「涅槃図の楽しみ」が、グラフでの内容をさらに深めて、『仏涅槃図の絵解き』として別冊本になりました。涅槃図の見どころを細かく解説します。涅槃図の新たな世界が広がります。



定価(本体150円+税) 100冊以上ご購入の方は、本体価格より1割を引かせていただきます。

仏教企画発行の刊行物

『修証義』解説 丸山劫外著	1,400円*
『うたい継ごうよ、子守唄』長田暁二・西館好子共著	1,200円*
『まんが問答一期一話』文 平和宏昭まんが 垣内敬遠	1,200円*
『道元禅より見たる般若心経解説』長井龍遺著	2,200円
『葬送のしおり』長井龍遺著	30円
修証義読本『生老病死』須田道輝著	500円*
『曹洞宗檀信徒必読』須田道輝解説	300円*
曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』霊元丈法著	140円*
曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』霊元丈法著	150円*

曹洞禅グラフ	発行日
春 彼岸号	2月20日
夏 お盆号	5月30日
秋 彼岸号	8月30日
冬 正月号	10月30日
1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

お申込み

〒252-0113 神奈川県相模原市緑区谷ヶ原2-9-5-5
TEL: 042-703-8641 FAX: 042-783-0989 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。

